

# 社会運動として移民をイメージせよ？<sup>訳注1</sup> —移民の自律性を思考するための理論ノート—

サンドロ・メッツァードラ\*  
(北川 眞也\*\*訳)

Mezzadra, S. 2004, *Capitalismo, migrazione e lotte sociali: appunti per una teoria dell'autonomia delle migrazioni*  
In Mezzadra, S.(a cura di), *I confini della libertà per un'analisi politica delle migrazioni contemporanee*, Roma, DeriveApprodi, 7-19.

「すると、何処にも限界はあり得ないし、投げ槍の飛ぶ先はたえず延長して行く、ということになる」<sup>訳注2</sup>  
Lucrezio, *De rerum natura*, I, vv. 982-3

1 移民と資本主義。これはややこしいテーマだと言えよう。いやむしろ、歴史的観点でも理論的観点でも、このタイトルのもとで取り組まねばならない問題構成の全容は、どれほど粘り強い研究者であっても不安を感じてしまうほどである。だから、まずは本稿で取り組むテーマの幅をせばめておこう。私の考えは、次のような文脈に位置づけられると思う。それは、史的資本主義における労働のモビリティ *mobilità* に関する研究群によって概略を描かれてきた文脈である（とりわけ Moulrier Boutang, 1998 を参照。また Mezzadra 2001 第2章も）。これらの研究は、主観的实践<sup>訳注3</sup>の総体と、資本の側からの「専制」管理との間の構造的緊張によって、資本主義自体がどれほど特徴付けられているのかを証明してきた。主観的实践とは、労働のモビリティが表現されるトポスのことである。資本制の展開は、数々の「伝統的」な社会的布置を途絶えることなく破壊してい

く。主観的实践とは、この破壊に向けられた的確な応答として理解できるものである。他方で「専制」管理というのは、根本的には国家の媒介によって実行される。

この双方の間の緊張から生じてくるのは、労働のモビリティを——もちろんそれに対応する主観性の具体的なかたちをも——有効利用すると同時に**抑制する**という複雑な装置である（Read, 2003 特に第1章を参照）。この観点からすれば、移民というテーマは、ひとつの基礎的な研究領域を構成することになる。そう、移民なしの資本主義は存在しないのだ。また移民の（労働のモビリティの）管理体制というのは、所定の歴史状況のその時々において現れてくるのである。だから、こうした移民管理体制というのは、私たちの分析にとって大事な鍵を握っていることになる。移民管理体制のあり方を分析することで、具体的な観点からでも大枠的な観点からでも、

\* ボローニャ大学

\*\* 大阪市立大学

労働が資本へ従属するあり方を再現できることになるし、同時に階級構成<sup>訳注4</sup>の変容を解説できるような特権的視座が提出されるからである。

近年、たくさんの様々な大陸できまっつて別個に、**移民の自律性**というテーゼが展開されつつあるのだが、そのスタート地点は、何よりもこういった類の研究成果なのである。この「移民の自律性」という表現によって、私は国際分業を統治する需要と供給に関する「法則」へと、現代の移民の移動を還元してしまうのは不可能であることを示そうと思っている。さらに言うならば、この表現によって、移動を引き起こす「客観的要因」に比しての、移動のなかに表現される多数の主観的な実践や要求の**過剰性**を示そうと考えているのだ。

以下の文章は、理論的・政治的観点からみた場合に、このテーゼから引き出しうる疑問のいくつかへ言及することで、それを掘り下げ精緻化するための予備的な——またかなり図式的な——考察である。この考察は、次のような自覚からはじまることになる。もし「企業家たちの要求を検討する」なら、もし「移民たちの主観的なモチベーションを考慮する」なら、移民の移動を統治可能な「フロー」という用語で表象する理解が危機に陥っていることは、今日ではとりわけ明白であるという自覚。そして、この危機が**統合**という概念や視座を中心に据えたあらゆる移民政策に対して根源的な挑戦を差し向けているという自覚である (Raimondi-Ricciardi, 2004, 特に p. 11)

2 最近 20 年における移民に関する主流派国際研究の発展のさまを簡単に再現しようとするなら、ここではここにおいても、「移民の自律性」というテーゼがある部分では少なくとも承認を得るようになってきたことがまずは強調されなければならない。たとえば、スティープン・カースルズとマーク・J・ミラーは、去年第 3 版に達して今ではもう「古典」となった『国際移民の時代』という本のなかでこう記述している。「移民は相対的な自律性によってもまた特徴付けられうる、つまり諸々の政府による政策とは無関係なかたちで展開しうるのである……当局の政策は、いつも目的を達成できていないどころか、望むこととは反対の効果を生み出している。国際移民

を現実に具現化するのには、当局以上に、人々なのである。個人、家族、コミュニティによってなされる意思決定が——いつも不完全な情報を用いて、極端に限られた選択範囲で——、移住プロセスを引き起こすうえで決定的な役割を果たすのだ」(Castels - Miller, 2003, p. 278)。

移民をプッシュとプルの「客観的」要因によって引き起こされる行為へ切り縮めてしまう新古典派の理論モデル（経済学的・人口学的な用語に傾倒している）は細かく批判されてきたし、今日それを確固たる方法で再唱しているのは、ほんとうに限られた人たちだけである。今では学際的アプローチがルールなのである。たとえば「移住システム」に関する理論によっては、人口移動の歴史の濃密さに対して注意が促されている。他方で、人類学者たちの研究は、形成途上にある新しいトランスナショナルな社会空間のエスノグラフィーに多大な関心を寄せている。そうした社会空間は、移民の自律性が物質的に表現される数多の振る舞いや社会的実践を記述するためには、辿り着かねばならない正真正銘の鉅脈なのである (Brettell-Hollifield, eds, 2000 参照)。国際レベルの議論のなかで、一種「新たな正説」として急速に人気を博してきたのが、「移民の新しい経済学 new economics of migration」(Massey et al., 1993, Portes, 1997) と定義できるアプローチだ。このアプローチは、移住プロセスのあらゆる局面に、家族や「コミュニティ」のネットワークが根本的に寄与していることを強調してきた——とりわけ、「エスニック」なかたちの企業形態に関する研究の全体に新たな刺激を与えてきた。この企業形態は、移住によって構築されるディアスポラのかつトランスナショナルな空間の内部に具現化されるのである。まさしくこうした企業形態のなかでこそ、多国籍企業によって自由に扱われる金融資本の代わりとなる「社会関係資本」が、家族やコミュニティのネットワークによってもたらされるのである (たとえば Jordan-Düvell, 2003, p. 74 参照)。

3 さて、国際レベルの移民研究のなかで有力となっている「新たな正説」を批判するには、思うに、次のことから出発しなければならない。つまり、私たちが今一度、言葉の十全な意味での「**社会統合**」

に関する理論に対峙しているということである。

第一に、この新しい正説が作り上げられたアメリカ国内の公的言説にみられる古典的作法にしたがうなら、これは実質的には次のような話で終わってしまう。移民の存在は、資本制システムとアメリカ市民権自体が有している特徴、つまり「社会的に成功・上昇していくというモビリティ」を確認するためのよりどころとして利用されるだけなのである。本や論文のなかではきまっていつも大げさに強調されるような排除、スティグマ化、差別の過程は、この枠組みのなかでは、資本主義（と市民権）の脇にもたらされる単なる効果として姿を現すことになる。この基本的に統合を規準とした決まり事に対しては疑問が投げかけられないどころか、むしろその決まり事が、移民の存在そのものによって途絶えることなく復元され、強化されているとみなされているのだ（この点には後ほど戻ろう）。

第二に、「新しい正説」は移民たちの社会・政治闘争を実質的に取り除いてしまうものだ。とりわけ最近のアメリカでの移民たち闘争は、9.11以降勢いを取り戻すようになり、昨年の秋に全国規模の行動のなかで「移民労働者フリーダム・ライド Immigrant Workers Freedom Ride<sup>訳注5</sup>」（Caffentzis, 2003 参照）という表現を考案し、労働組合を底知れないほどに変革してきたのである。「新しい正説」の視座のなかでは、これらの闘争はせいぜい、本来的には商業的・経済的な価値によって与えられる<sup>訳注6</sup>市民権へとアクセスする仕方の単なる従属変数としてしかみなされない（Honig, 2001, p. 81）。

しかもこのとき、アメリカ市民権とは一方的に拡張されてゆくものだというイメージが呈示されることになる。この市民権のイメージでは、アメリカ史のなかで包摂と排除との弁証法（特に不法滞在外国人 illegal aliens のポジションを通して）が果たしてきた構成的な役割も、文字通り外国人市民 alien citizens という形姿を生産してきた多数のエスニック・「人種的」なラインがもたらす国内の階層化も考慮されることはないのである（Ngai, 2003, 特に pp. 5-9 参照）。

4 だから、移民の自律性というテーゼは、こうした背景を考慮して再定義されなければならないし、そ

の値打ちを測定されなければならない。思うに、このような課題に取り組むには、一方での移民たちの社会運動（それはまさに主観的側面に刺激を与える自律性と「過剰性」の要素を有している）と、他方での生きた労働の**搾取**との間にみられる構成上のつながりを強く主張しなければならない。またそれと同時に、何よりも移民たちの闘争を前面にクローズアップしなければならない（この本の Bojadzijevev – Karakayali – Tsianos の論文）。とはいっても、もちろんこれらの闘争は、移民の経験のあり様に即したかたちで引き起こされる。だから、どのようなかたちで闘争が引き起こされるのかという点には留意しなければならない。さらには、移民の経験というのは、「人種主義」を新しく概念化するためには不可欠の言及地点でもある。移民の経験から、諸々の社会関係のなかで、絶えることなく人種主義が立て直される過程を説明できるのだ。なぜなら、移民は単なる「犠牲者」ではなく、まさに抵抗と数々の争いをもたらし変革の実践を表現する主体として存在することで、これらの社会関係を条件・特徴付けているからである（Bojadzijevev, 2002 参照）。

いつも私たちが強調してきたことだが、移住が空っぽの空間のなかで引き起こされるものでないことは、いつだってはっきりとしている。現代の移民は、1980年代にたくさんのアフリカ諸国でなされた IMF（国際通貨基金）の構造調整プログラム、さらには1960年代以降の多国籍企業による海外直接投資によって引き起こされてきた根源的かつ破局的な幾多の変革のさまを考慮せずには理解できない。こういったことこそが「輸出加工区」を創出し、伝統的農業を崩壊させてきたのである（特に Sassen, 1988 参照）。したがって、移民の自律性というテーゼは、ノマディズムに関するあらゆる唯美主義的な賛美からは確かな距離をとることになる。このテーゼは、構造調整プログラムや多国籍企業の活動といった現象が、いわゆる「脱植民地化」の局面に顕著だったたくさんの社会蜂起や市民権の要求に対して応答するなかで生みだされてきたこと、つまりひとつの応答として用意されてきたことを強調するのである。しかしその一方では、この経験の内側で、移民のなかに表現されている多数の主観的振る舞いの豊かさを解き明かすことも、このテーゼの目的であ

る。現代移民の姿をよりいっそう際立たせているのは、**乱流**という要素の数々なのである (Papastergiadis, 2000)。移民の自律性というテーゼからすれば、これらの要素は「労働市場」の均衡に対する構造的な**過剰性**として姿を現すことになる。だから、搾取の装置というのは、現代の生きた労働全体に対して遍く広がりゆく効力をもたらしながら、この過剰性に基づいて絶え間なく作り直されることになるのだ。

5 移民を統治するグローバルな体制について語られるとき (たとえば Düvell, 2002 とこの本に所収された彼の論文を参照)、私はこの表現によって、主権の行使をめぐって構造的に**異種混淆**状態にある体制を示そうと思っている。国民国家 (それほど独占的ではないけれども、まさにここにおいて国民国家は「グローバル化」のシナリオのなかでの自らの堅固さを見せている)、EU のような「ポスト国家的」な編成、国際移住機関 IOM (International Organization for Migration) や「人道的」な目的のための NGO といった新しいグローバルなアクターたちが、主権を定義し機能させるかたちで収束・協力しているのである。**これは**どういうことだろう。この点をはっきりとさせておかねばならない。確かにこの移民統治体制がもたらすもっとも直接的な効力は、ボーダーを要塞化し、拘禁と追放の装置を洗練させることなのだろう。しかしにもかかわらず、この統治体制は、移民たちを**排除**することにねらいを定めているわけではないのである。そうではなくむしろ、現代移民の移動を際立たせる過剰性 (**自律性**) が有する諸々の要素を有効利用し、経済的均衡状態へと結びつけること、すなわちそれらを**搾取**することが目的なのである。

別言しよう。目的は、「豊かな国々」のボーダーを完全に閉じてしまうことなどではない。そうではなく、「ダム」のシステムを設けることが目的なのである。つまり、私たちの研究に非常に近いアメリカの研究者によって示された表現を用いるなら、「非合法化を通して移民労働を包摂する積極的なプロセス」(De Genova, 2002, p. 439) を生産することが最終的な目的なのだ。

このような観点から、経済協力開発機構 OECD の 2000 年の報告書に記載されているクロード・ヴァレ

ンティン・マリーの主張を解釈できる。その報告書によれば、インフォーマル経済で「不法に」雇われている移民労働者というのは、グローバル化の現段階を多くの側面で象徴している存在だということである (Marie, 2000)。では、**私たちの観点から** (経済協力開発機構の観点ではない)、これらの側面を幾つか考察してみよう。

私たちはこう主張できる。「不法」移民とは、当初は労働者の社会的振る舞いとして出現したはずの労働の「柔軟性」、つまり労働にもたらされた最大限の「柔軟性」が、柔軟性そのものを管理制御する (最悪の場合は否定する) もっとも厳格な装置の働きとぶつかり合うところに位置している主観性のかたちである、と。重要なことは、「不法移民」のなかに階級構成全体の新しい「前衛」としてのポテンシャルを見出すことではまったくない。そうではなく、この具体的な主観的ポジションを介して、全体的として現代の生きた労働の構成を読み取ることが重要なのだ。それは、非常に多岐に渡るスケールで展開される一方で「柔軟性」(モビリティ) と他方での管理制御からなる多様な錬金術によって——だんだんとグローバルなレベルにおいて——特徴付けられた労働の構成である。

この観点からすれば、数々の分断で特徴付けられた労働市場というカテゴリー自体が (Piore, 1979)、まったくもろくて論拠の薄弱なものである (比喩的な意味ではなく) ことが明らかとなる。そこから、労働力と資本の間の「出会い」(マルクス流のカテゴリーを復活させると) について考察するよう促されることになるのである。この「出会い」においてこそ直接に、またモビリティの統治に基づいたかたちで、支配と搾取をめぐる諸々の関係が形成されるのである。こうした関係というのは——その構成上の暴力とともに——、既存の地図の秩序を絶え間なくかき乱し、ちょっとした理論モデルならば簡単につがえしてしまうようなものだ。そして、私たちの議論にとりわけ重要なポイントに限ってみても、この関係を通じてこそ、絶対的剰余価値と相対的剰余価値の抽出が同時に生じるということ、資本の下への労働の形式的包摂と実質的包摂が同時に起こること、そして非物質的労働と強制労働が同時に発生することを説明できるのである。こうして、一

方でのニュー・エコノミーと、他方での新たなエンクロージャーを伴った本源的蓄積の幾つもの新しいかたちとの間の構造的な結びつきに光が当てられることになるのだ。

6 そういうわけだから、移民の自律性のテーゼがもたらす具体的な利点というのは、生きた労働とその**主観性** *soggettività* の観点から、現代資本主義の枠組みに生じている数々の変容を再建できるという点にあると言える。この点に関しては、一旦話を後ろに戻さなければならない。つまり、「移民の自律性」をひととき大きく扱っている観点の一つであり、国際移民研究のなかで有力になってきた「新しい正説」を検討し直さねばならないのである（先ほど述べた通りだ）。はっきり言うならば、「移住プロセスには、家族やコミュニティのネットワークが根本的に寄与している」という理解を検討し直さねばならないのだ。新古典派の手法は、移民の移動の主役として、合理的な個人という抽象的イメージをずっと想定してきた。このイメージを批判して、たとえばアレハンドロ・ポルテスは次のように記述している。「あらゆることを個人の領域へと還元してしまうようなやり方は、家族、親戚のネットワーク、コミュニティのようなもっとややこしい要素を、分析や予測の根拠として利用する可能性を閉ざしてしまうことを意味する。これは、受け入れようのないかたちで、研究を制限することに相当する」（Portes, 1997, p. 817）。つまり、ただこのポルテスが支持するやり方を用いることによってのみ、現実の社会経験を分析対象として設定できるというわけだ。

ここにおいて、次のようなことに直面する。すなわち、「移民の新しい経済学」が新古典派経済学に行った批判と、共同体論者がリベラリズムの理論に行った批判との間には、はっきりとした類似点が簡単に見てとれるということである。この類似点は、マイケル・ウォルツァーによって表明された移民への見解を用いて裏づけることができる。ウォルツァーによれば、アメリカへ向かってくる「移民の波」は、基本的には以下の点でアメリカ社会に貢献しているのである。移民たちが共同体のあり方を是正するような働きを受け入れ社会にもたらすという点である。社会の絆というのは、資本主義の展開によっていつ

も異議を唱えられているのだが、移民たちはそれを情緒的なレベルで補うような力を受け入れ社会にもたらすのである（特に Walzer, 1992 参照）。思うに、この「移民の新しい経済学」とウォルツァーのような共同体論者の類似点こそが、家族やコミュニティのネットワークへ無批判に言及する態度に対して、私たちに警戒感を抱かせるのだろう。

ここ数十年の間に活躍してきた様々な運動によって、昔からの社会的役割や決まりというのは、西洋では激しく異議を唱えられてきた。だがそれらの有効性を再度打ち立てようとする際には、ウォルツァーの「進歩主義」的着想が、移民の男女たち（当然全ての移民ではない）によって果たされる役割を重要視する言説群のなかへ、あっさり消えていくのは明々白々なのだ。これは、『民主主義と外国人』という重要な本のなかで、ボニー・ホーニグによって見事に論じられていたことである（Honig, 2001, pp. 82-86）。

こうした話は、何か抽象的で少しわかりにくいと思われるかもしれない。だが、そんなことはない。たとえば、新しいトランスナショナルな結婚専門情報会社が活躍している市場があるが、それは著しい勢いで拡大する傾向にある。この市場は、家族内でのジェンダー間の役割分担を家父長制的に再び「正常化」したいという男性の要求に基づいて誕生してきたものだ。そしてそこでは、「家族と夫への欲求が何よりも大事」という「従順でやさしい女性」が差し出されているのである（Honig, 2001, p. 89）。だが、「従順でやさしい」存在として紹介されていた女性の多くが、実際にはグリーンカードという永住権を取得することだけに関心があり、最初のチャンスを利用して素早く行方をくらまそうとしているのである。「新しい男性性」がもたらす数々の異国趣味や幻想のおかげで育まれた外国人好きというのは、こうした事態が明らかになったときには、勢い良く外国人嫌いへと変換されていくことになるのは言うに及ばない。

7 ここで思うのは、移民たちの主観性について思考するための特権的な観点というのは、やはりこうした女性たちによってたどられた数々の逃走線によって差し出されるのではないかということだ。これら

の逃走線と、シェンゲン空間を形成するヨーロッパにいるたくさんの「EU 域外」出身のセックス・ワーカーたちの振る舞いと類似点を模索してみるのもよいだろう (Andrijasevic, 2004 参照)。ここでの問題が、新古典派経済学を復活させることでも、合理的な個人という抽象的な人物像を介して移民の男女について考えることでもないのは明らかである。

思うに、移民に関するフェミニスト研究の成果から、私たちは多くのことをここで教えられないだろうか (たとえば最新の文献のなかでも Ehrenreich-Hochschild, eds, 2003 参照)。昨今拍車がかかっている現象として、「移民の女性化」というのがあがる (たとえば Castels-Miller, 2003, p. 9 参照)、ここでの観点からすれば、やはりそれは並外れて特別な調査領域となってくる。

ここで私たちが、途方もなく**両義的な**意味を有する過程に向かい合っているのは明らかだ。ラセル・サラサール・パレーニャスは最近の研究で、ローマとロサンゼルスという都市のなかで、フィリピン家事労働者たちが置かれた条件を分析している (Parreñas, 2001)。パレーニャスが明らかにしたのは、次のようなことである。つまり、出身国の家父長制によって支配された諸々の関係性から逃走し、西洋の「解放された」女性たちがしたがらない情動労働とケア労働を彼女たちの代わりに担うようになり、そして階級とジェンダーがもたらす服従の条件が再生産されてしまうことになるというややこしいゲームだ。それは、間違いなく現代の女性移民の大多数が参加しているゲームである。

おそらく、もし「グローバル・サウス」の内部での女性移民についてもっとたくさんの資料を用意するならば、私たちはこうした言説を深めることができるし、精緻化することができるのだろう。そのためには、とりわけ「輸出加工区」の生産性を支えてきた労働力移動について言及することが重要になるのだろう。だがたとえそうだとしたとしても、すでに確かなこともある。それは、移民のなかには伝統的な所属のシステムを解体する幾つもの過程が (もちろんその止むことのない再構成や、「(サッカーの) スローイン」のようにその構成のゲームを再開させる過程も) 表現されているということである。まさしくこの状況こそが、移民に関する国際レベルの研究

のなかに広がっている移民のイメージ、すなわち家族やコミュニティのネットワークのなかに**はめこまれた**「伝統的」な主体としての移民のイメージを——分析レベルでも政治レベルでも——提唱不可能なものにしてしまうのだ。このようなイメージの眼前には、(こうしたネットワークの支えから抜け出すこと求める、あるいは憤りを表現することを求める) 西洋的な**個人**がくつきりとその姿を現しているのである。

ラカン流のイメージを用いるならば——しかしマルクスのなかにも同様の前例を簡単に見つけられよう——、移民とは「斜線を引かれた」主体なのである。移民は、所属に対して複雑で矛盾した関係を生きている。ともかくこのようなかたちで、所属というのは定義される。現代移民に関する**政治的な**解釈を仕上げるためには、私たちはまさしくこの「斜線」(単純化すると、個人の行動というものが、埋め合わせることのできない欠如の記号に刻まれることで、その行動自体を引き起している時空の状況と衝突する地点) から出発しなければならないのである。

8 ここでは誤解をさけるために、すぐさま次のように言っておこう。「斜線」というのは、ただの比喩にすぎないし、おそらくとりたてて巧みな比喩だというわけでもない。移民たちが置かれた条件について語る際には、注意して比喩を操らなければならないのだ。とりわけ英語圏のカルチュラル・スタディーズのなかで広まっている趨勢、つまり「ノマディズム」や「根こぎ」といった肉体から遊離した唯美化された賛美や弁明を生産する趨勢について少し述べてきたが、それはそこから距離をとるためだった。さらに、現代の哲学的かつ理論的・政治的議論のなかで、「難民」や「移民」に割り当てられてきた特権的な地位に注目してみれば (数人の名前をあげるなら、デリダからアガンベン、ハートとネグリからバリバルに及ぶ)、移民についての比喩や讃えるようなイメージが増殖している一方で、**両義性**を背負い込んだ移民たちのまさしく物質的な経験、言うならば感覚によって捉えられるような経験が失われてしまっているという印象をときに告げずにはいられなくなってしまうのである。今は亡きエドワード・サイードとともに言うなら、「故国喪失は、それについ

て考えると奇妙な魅力にとらわれるが、経験するとなる最悪である」<sup>訳注7</sup> (Said, 1984, p. 173) ということが、忘れられてしまう危険があるのだ。

しかしながら、比喩言語の限界に対する貴重な戒めでもあるが、その使用を支持する議論として、写真ルポ形式の素晴らしい本を引き合いに出すことができる。これは1970年代に出版された本で、まさに移民労働者たちの**経験**に光を照らすことを目的としていた。その本(『七番目の男 A Seventh Man』)のなかに次のような一節がある。「経済理論の言語はきまって抽象的なものである。だから、もし移民の人生を規定する力を把握し、かれの個人的な命運に含まれた一部としてそれらの力を理解しようとするならば、私たちにはそれほど抽象的ではない表現が必要となるだろう。そう、私たちには比喩が必要なのだ。だが比喩は一時的なものであり、理論に取って代わってしまうようなものではない」(Beger-Mohr, 1975, p. 41)。

私たちには比喩が必要だ。30年後の私たちは、さらに次のように言い添えることができる。経済、政治、文化の間の伝統的な区分が完全に乗り越えられていると思われる状況——現代のグローバル資本主義という状況。移民という現象を分析することで、グローバル資本主義のひときわ革新的な特色のいくつかを把握できる——においてはなおさら比喩が必要なのだ、と。この状況では、市民権や「アイデンティティ」に生じている数々の変容を理解するという問題を同時に設定することなくして、搾取や資本の価値増殖について語ることはまったく不可能なのである。この状況では、所属という領域に生じている脱節合の過程の総体を同時に考慮することなく、もはや労働者階級について語ることは不可能なのである(その過程のなかには、生きた労働の主観性が有する消去不可能な痕跡が刻まれている)。そこでは、もう取り返しのつかないかたちで、労働者階級は**マルチチュード**として形成されている。

移民たちが置かれている条件というのは、ちょうどこれらの過程が交わり合うところ、交差点に位置しているのである。だから結局は、移民たちの置かれた条件を一番クローズアップしてきたもっとも抽象的な哲学的議論であっても、これらの過程について緊急に考察しなければならぬ状況に置かれてい

るのである。

9 結論に向かうにあたって、私は次の問題に対して注意を喚起しておきたい。それは、移民たちが置かれた条件を**政治的に**定義するという問題である。いったんかれらの条件が有する大枠の特徴を定め、**社会運動**として考えられた現代の移民を刺激する自律性や過剰性の要素を明らかにしたなら、ここからどんなやり方で移民たちの闘争を理解することができるのだろうか、またどんなやり方で理解しなければならないのだろうか。そして今ここにおいては、かれらの闘争はどのような視座のなかに組み込まれることになるのだろうか。

これらの問いに対して、部分的ではあるがひとまず議論の発端となるような返答をするために、さらには、私たちの政治的想像力の限界を指摘しておくためにも、ここで2冊の本をとり上げたいと思う。この2冊の本が近年の政治的・理論的議論にもたらされたもっとも重要な功績のなかに含まれると考えるからである。それは、ジャック・ランシエールの『不和あるいは了解なき了解——政治の哲学は可能か』と、先ほどすでに引き合いに出したボニー・ホーニグの『民主主義と外国人』である。ランシエールの思考の概略は有名であり、粗雑に単純化することもできるだろう。つまり、政治とは、フーコーになぞってランシエール自らが**ポリス**と定義するものを支える「分け前の考慮＝計算」(配分の建築構造)を混乱・解体させる「分け前なき者」の主観化というかたちでのみ存在するというのである。「分け前なき者」が「何らかの話す存在同士の平等——算術的でも幾何学的でもない——の偶然性」<sup>訳注8</sup>を再び可動させることによって、政治をもたらすのである(Rancière, 1995, pp. 50ss)。

『不和あるいは了解なき了解——政治の哲学は可能か』が出版された翌年、1996年にサン・パピエ<sup>訳注9</sup>たちの闘争が勃発した。これらの闘争のなかに、ランシエールの思考の中心に位置する「分け前なき者の分け前」という概念のよりどころを見出してしまう。確かにこの欲求に抗うのは困難である。実際、このような解釈の仕方に正当性を与えているのは、ランシエールその人なのだ。ランシエールは、「移民」というのが、どれほどフランスでは比

較的新しい主体だったのかを強調している。かれらが「新しい」のは、非常に単純な理由による。20年前の時点では、かれらは「移住労働者」と呼ばれていたがゆえに、所定の「ポリス」体制（付け加えれば、それはフォード主義の体制だろう）の配分メカニズムのなかで確かな分け前を有していたからである（ivi, pp. 161ss 参照）。

だから、分け前のない移民たち（私たちが好むのは「入移民 *immigrati*」よりも、「移民 *migranti*」である）は、「分け前なき者の分け前」という役回りを引き受けるには「もっともな」候補者へと近づいていったのである。近代という時代のなかで、とりわけプロレタリアートの闘争や女性の闘争が示してきたように、ただ「分け前なき者」の主観化だけが、**政治的活動**——つまりは普遍的なものの再創造——を引き起こすことができるのである。

ボニー・ホーニッグの思考は、ランシエールとはまた違った分析の枠組みのなかで展開されているが、根本的にはランシエールの思考を繰り返している。ホーニッグは、一方の移住してきた社会に対して何か与えるべきものを有する主体<sup>訳注10</sup>としての外国人のイメージ——「外国人好き」——と、他方のその社会から何かを「手に入れる」ことに関心をもつ主体<sup>訳注11</sup>としての外国人のイメージ——「外国人嫌い」——の間にある相応関係を、かなり説得力のあるやり方で批判している。そして、ホーニッグは非常に魅力的なやり方で、これらの用語の使用順序を逆さまにして、「この「手に入れる」という方こそを、移民たちが私たちに与えるべきものとして」考えるよう提案するのだ（Honig, 2001, p. 99）。別言すると、ホーニッグによれば、（法制的に成文化された市民権からは根源的に排除された状況にもいる）移民たちの市民権への欲求が表現を見出す数多の**実践**というのは、民主主義を支える土台に対して構造レベルで疑問を投げかけるものとなりうるのである。これらの実践こそが、民主主義の制度上の布置を越えたところで、強度を増すという意味においても、拡大するという意味においても（つまりは、国民国家のボーダーを越えたところで）、移民たちの運動を深化させ、新たな展開へと切り開いていくのだろう。

「新しい権利、新しい力、新しいビジョン」を生み出すのは、「ポリス」体制の「考慮＝計算」のなか

には含まれない人たちの要求であると政治を概念化するにあたって、ホーニッグがランシエールを参照しているのは確実である（ivi, 9. 101）。

10 こうしたかたちで具体化される「政治的共同体」のイメージについて考えるべく、ここで少し立ち止まろう。ランシエールはこう書いている。政治的共同体とは、「一時的で局所的な中断と亀裂の共同体であり、この中断と亀裂によって、平等の論理はポリス的共同体を共同体自身から切り離すことになる」<sup>訳注12</sup>（Rancière, 1995, p. 186）。思うに、ここで私たちが「ラディカル・デモクラシー」と定義できる理論に向き合っているのは明らかではないだろうか。というのは、分け前なき者の分け前の政治的な現れが、あるひとつの「ポリス」の体制を脱節合させる契機、**開放する契機**として考えられるからである。だがこのように言ったところで、こうした話が辿り着くところは結局、分け前と分け前なき者の分け前からなるまた別の新たな「ポリス」の体制となってしまうのである。

さてここにおいて、次のことははっきりしている。重要なことは、ラディカル・デモクラシーの議論の発端となった著作、初版が1985年にまで遡るエルネスト・ラクラウとジャンタル・ムフの『ポスト・マルクス主義と政治——根源的民主主義のために』という周知の著作に対して、ランシエールの仕事を低く見積もるといったことではまったくないのだ。私に言わせれば、ランシエールの本はこの上なく豊かなものであるし、多大な興味を引き起こすものである。その理由としては何よりもまず、ランシエールが「民主主義は**生み出される**」という問題提起を行っているということがある。ランシエールは、ヘゲモニー概念の再解釈を土台に据えたラクラウとムフのように、民主主義を**所与**の何かとして想定するようなことはしない。ラクラウとムフに沿っていくとしまいいは、民主主義は政治的「節合」の「一般性」と同一のものになってしまう。それは個々の社会闘争が有する構造的に「部分的」な特徴とはまったく相反するものである（Laclau-Mouffe, 1985, 特に p. 169 参照）。しかし、それでもラクラウとムフに「功績」を認めるとするなら、それは次のような点にある。つまり、あるひとつの長期的な歴史的サ



イクルのなかに刻み付けられ、そこに痕跡を残すことになる問題群をすでに先取りし予想していたという点である。それは、近年になってグローバルなレベルで展開されるようになった多数の運動こそが、広い意味で「根源的かつ民主的」と規定されるような参照符号なかに、自らの活動を刻み付けてきたということである——そして、このグローバルな運動によって語られてきた法権利の語法がもつ「自然な感じ」によって、この事実は裏付けられていると思う。

近年なされたひととき興味深い幾つかの理論的提案（多くの点でかなり異なっている2つの提案を挙げるなら、ハートとネグリー<sup>訳注13</sup>の提案とジョン・ホロウェイの提案がある）もまた、「根源的かつ民主的」という参照符号の枠組みを大きく変革しこじ開けている。しかしそうは言っても、これらの提案が（ホーニッグのところでみたように、強度を増すという意味でも、拡張するという意味でも）民主主義を深化させる効力をもったオルタナティブを提供しているというわけではないのである。

ここで移民に話を戻すなら、エチエンヌ・バリバルの研究にせよ、私たち自身の政治的・理論的な実践にせよ、これらも実質的には今述べてきた「根源的かつ民主的」と規定される同一のシナリオの内部で進行してきたと言えるのである。

11 さて、この点に関して問題となっていることは、単にこれらの民主主義の言説に含まれているいわば現実に対する仮定法的な特性なのではない（近年、**現存する**民主主義の展開が、これらの言説が想定するのはまったく別の方向にすすんできたという意味において仮定法的なのである……）。問題は、次のことを理解することである。つまり、近代民主主義の政治史に含まれている断絶を、つまり資本制生産様式によって支えられて継続している支配と搾取のなかにある中断を、今一度想像することができるのかどうかということだ。この問題は、惜しむことなく過去へと捨て去ったほうがよい教義や確証に逆戻りしてしまわないかたちで、理解されなければならない。そう、つまるところ、この中断、この断絶というのは、マルクス流の「ある事柄についての夢」、革命、**コミュニズム**のことだったのだ。

問題は、今一度（ともかく限定された）民主主義に抗してコミュニズムを賭するといったことではない。私たちは、均衡をもたらす**制度上のシステム**としての民主主義（古典的な用語で言えば、統治形態としての民主政であるが）と、運動としての民主主義を区別すること——この点はスラヴォイ・ジジェクの視界からはきまって見失われているようにみえる。だが、ジジェクはここで議論してきた諸々の問題に注意を促してきた功績を有する（最近の著作 Zizek, 2004, pp. 183-213 参照）——を学んだ。運動としての民主主義においてこそ、制度上での市民権の成文化よりも、重商主義によって形成される関係性が織りなす組織よりも、過剰な多数の主観的要求の全体が政治的に表明されるのである。

大雑把に解釈すると、西ヨーロッパでの福祉システムの危機と、「現存する社会主義」の危機というのは、まさにこの制度としての民主主義と、運動としての民主主義との間のズレを私たちに突きつけているのである（Piccinini, 2003 参照）。だがとは言ってみたとこで、統治形態としての民主主義と運動としての民主主義の間には、やはりある関係が定められなければならないだろう。民主主義の論理では、この関係はただ**等価性**（ランシエールの語彙ならば「分け前の考慮＝計算」というかたちでのみ考えられてしまうのである。本稿での議論にとどまるならば、次のように言えるだろう。現代移民を際立たせる特徴としての自律性や過剰性の要素が、ラディカル・デモクラシーの視座のなかで識別されるのは、労働市場というフィクションを根拠付ける市場均衡の総体と接続されている場合に限るのだ。逆に言おう。これらの要素は、労働市場に均衡をもたらす構成上の暴力が疑問に曝されない場合に限ってのみ、ラディカル・デモクラシーの視座のなかでは識別されるということなのだ。

別言しよう。ここで明らかとなっているのは、以下のようなことだ。「分析的マルクス主義」の浮沈とその最終的な敗北によって、かなりはっきりと浮き彫りになったのは、搾取という問題を正義論へと切り縮めてしまうことはできないということ、**搾取**という問題はどんな類の正義論にも還元してしまうことはできないということである。

こうしたわけだから、おそらく、ある比喩言語に

基づいて、暫定的なかたちではあるが、私たちは双方の折り合いをつけられるのではないだろうか。すなわち、今日では、ラディカル・デモクラシーを**補完する**ものとして、コミュニズムを思考できるということである。コミュニズムは、ラディカル・デモクラシーの地平の内部に位置するが、その論理に還元してしまふことはできない。それは民主主義の運動が有する諸々の**限界**を示唆するものとしてのコミュニズムである。民主主義の運動からは構造的に排除されることになる政治の**可能性**を突きつけるものとしてのコミュニズムである。

移民の自律性に関する私たちの仕事は、こうした方向に進んでいるのだと思う。私たちは、移民たちによる多数の要求に見出される豊かな主観性組織を、つまり、民主主義の承認をめぐる弁証法には還元することができないかたちで表現される主観性組織を明らかにするべく光を投げかけるのである。

## 訳注

- 1 本論文のタイトルは、原文通りにしたがえば「資本主義、移民、社会闘争」となる。しかし、日本語環境で発表する場合、このタイトルからメツァードラの試みもつ知的な魅力を伝えることが難しいと判断した。そこで、訳者から著者に「社会運動として移民をイメージせよ？」というタイトルはどうかと提案したところ、著者は快く了解してくれた。このような移民を社会運動として理解するような着想は、ヨーロッパで移民の権利を求めて活動する様々な社会・政治運動のなかでも、広く浸透するようになってきている。これらの運動とも広く連携するメツァードラの本論は、この着想に対する理論的基盤を与えているとも言えよう。
- 2 邦訳は、ルクレーティウス（樋口勝彦訳）『物の本質について』岩波書店、1961、54頁。
- 3 本文中に頻りに登場する「主観的実践」、「主観性」、「主観化」といった用語は、メツァードラの移民に対するアプローチの根幹に位置していると言えよう。「主観性」とはイタリア語では *soggettività*、英語で言うなら *subjectivity* にあたる。これは「主体性」と訳されることもあるが、本論文の冒頭で、移民を引き起こすとされたさまざまな「客観的」条件との対比で、この言葉が用いられているため、一貫して「主観性」と訳している。「主観性」は現代思想のもっとも核心に触れる用語であるが、メツァードラの知的形成過程を考えると、それはイタリアの「オペライズモ

*operaismo*（英語 *workerism*）」という共産党の外部で展開されたマルクス主義の政治的・知的アプローチが重要となる。それは主に、1950年代後半にイタリア北部あるいは中部で形成され、1970年代後半に至る時期まで繰り返されてきた。そのはじまりは、フォード主義社会で「大衆労働者」が引き受ける政治的・理論的中心性を考察することだった。労働組合の外で起こる闘争に参加して、「大衆労働者」の自己組織化の動きや、資本との関係内部における労働者階級の自律性を解釈し理論化してきた。メツァードラは、まさしくこの労働者、そして移民が自己参照的に表現する力、自らを生成変化・創出させる力の働き（それは移住・越境という行為のなかみられる）のことを「主観化」と呼んでいる。この力がモビリティを管理する装置が織りなす布置を変化させるということ（逆に言えばそれを作りかえるということもある）、現実を変化させるということだ。この用語の翻訳をめぐる「難しさ」に関しては杉村昌昭の解説が示唆に富んでいる（アントニオ・ネグリの『さらば“近代民主主義”——政治概念のポスト近代革命』（2008年、作品社）の「訳者あとがき」を参照）。

- 4 「階級構成 *composizione di classe/class composition*」とは、オペライズモの主要概念のひとつである。それはある歴史的時点における労働者階級が内在化している行動や規範の組織体のことである。階級構成は、労働の技術構造、階級のニーズや欲望のパターン、政治的・社会的活動が生じる際の制度などの相互作用によって規定されている。労働者の効果的な組織化や活動を生み出すためには、階級構成を経験的研究から理解することが必要であると考えられた（Negri, A. 2005, *Books for burning: between civil war and democracy in 1970s Italy*, translations edited by Murphy, T. S., Translated by Bove, A., Emery, E., Murphy, T. S., and Novello, F., London-New York, Verso, p. xxxii）。
- 5 「移民労働者フリーダム・ライド」とは、125,000人にもぼる労働組合や政治団体の支援者たちが、1,000人ほどの移民たちと合流し、2003年の9月20日から10月4日にかけて、移民政策を変革するための支持を求めながら、アメリカ大陸を西海岸からニューヨークまで横断するというものだった。詳細は <http://www.iwfr.org/default.asp> 参照。
- 6 この商業的・経済的な市民権とは、実利主義、資本主義、生産、消費と同義のものとして理解されている。このような市民権を求める移民は、ただ自分の仕事に忙しく、裕福になることだけを考えていて、市民・政治生活にはほとんど関心を示さないとみなされる。「かれらはアメリカン・ドリームを生きることに忙しすぎるのである」（Honig 2001: 81）。
- 7 邦訳ではサイド（2006: 174）。
- 8 邦訳ではランシエール（2005: 58）。

- 9 「サン・パピエ *san papiers*」とは、滞在許可証なしで不法に滞在する外国人のことである。ちょうどこの文脈で意識されている闘争とは、1996年3月18日に起こったおよそ300人のサン・パピエたちによるパリのサンタンブローワーズ教会の占拠にはじまる一連の出来事のことを指していると思われる。
- 10 英語で言うなら *giver* としての外国人である (Honig 2001: 99)。
- 11 英語で言うなら *taker* としての外国人である (Honig 2001: 99)。
- 12 邦訳ではランシエール (2005: 222)。
- 13 ちなみにネグリは、メッツァードラの本論文が収められている『自由のボーダー——現代移民の政治的分析のために』の書評のなかで、メッツァードラが言うようなかたちでランシエールとホーニグを評価することに対しては疑念を投げかけている (Il manifesto 紙 2005年2月4日)。ネグリにとっては、移民の自律性それ自身が政治的にも構成する力となるのである。だから、移民がもたらす変革の潜勢力のかたちを捉えることなく、分け前なき者の分け前の要求が出現する契機のみならず、ポリスを危機へと導く政治の姿を論じるわけにはいかないのだろう。ただしメッツァードラは、まさにこのような自律性の設定から政治的な構成へと、ある意味では直に移行する議論こそが、主観性の構成プロセスへの思考を制限し、政治の欠如をもたらしていると指摘したこともある (Mezzadra, S. 2002, *Intervista a Sandro Mezzadra. 3 aprile 2001*, in Borio, G. - Pozzi, F. - Roggero, G. (a cura di), *Futuro Anteriore: dai Quaderni Rossi ai movimenti globali: ricchezze e limiti dell'operaismo italiano*, Roma, DeriveApprodi)。そして、メッツァードラは、この主観性の政治的構成を思考するために、移民の自律性と既存のポリス体制の間の概念装置として「市民権」に言及し、その再定義を形成されるヨーロッパ政治空間を舞台に試みているとも考えられる。

## 参考文献

- Andrijasevic, R. 2004, *I confini fanno la differenza: (il)legalità, migrazione e tratta in Italia dall'est europeo*, in «Studi culturali», I, 1, pp. 59-82.
- Berger, J. - Mohr, J. 1975, *A Seventh Man. A Book of Images and Words about the Experience of Migrant Workers in Europe*, Harmondsworth, Penguin.
- Bojadzic, MN. 2002, *Antirassistischer Widerstand von Migrantinnen und Migranten in der Bundesrepublik: Fragen der Geschichtsschreibung*, in «1999. Zeitschrift für Sozialgeschichte des 20. und 21. Jahrhunderts», 17, 1.
- Brettell, C.B. - Hollifield, J.F. (eds) 2000, *Migration Theory. Talking Across Disciplines*, London - New York, Routledge.
- Caffentzis, G. 2003, «*Guerra al terrorismo*» e classe operaia americana, in «DeriveApprodi», 24, pp. 22-25.
- Castles, S. - Miller, M.J. 2003, *The Age of Migration. International Population Movements in the Modern World*, Third Edition, New York - London, The Guilford Press. [カースルズ・ミラー (関根政美・関根薫訳) 『国際移民の時代』名古屋大学出版会, 1996年 (1993年に出版された初版の翻訳)]
- De Genova, N.P. 2002, *Migrant "Illegality" and Deportability in Everyday Life*, in «Annual Review of Anthropology», XXXI, pp. 419-447.
- Düvell, F. 2002, *Die Globalisierung der Migrationskontrolle. Zur Durchsetzung des europäischen und internationalen Migrationsregimes*, in AA.VV., *Die Globalisierung des Migrationsregimes. Zur neuen Einwanderungspolitik in Europa*, «Materialien für einen neuen Antiimperialismus», H. 7, 2002, pp. 45-167.
- Ehrenreich, B. - Hochschild, A.R. (a c. di) 2003, *Donne globali. Tate, colf e badanti*, trad. it. Milano, Feltrinelli, 2004.
- Honig, B. 2001, *Democracy and the Foreigner*, Princeton, NJ, Princeton University Press.
- Jordan, B. - Düvell, F. 2003, *Migration. The Boundaries of Equality and Justice*, Oxford, Polity Press.
- Laclau, E. - Mouffe, Ch. 1985, *Hegemony and Socialist Strategy. Towards a Radical Democratic Politics*, 2nd edition London - New York, Verso, 2001. [ラクラウ・ムフ (山崎カヲル・石澤 武訳) 『ポスト・マルクス主義と政治——根源的民主主義のために』大村書店, 2000年]
- Marie, C.-V. 2000, *Measures Taken to Combat the Employment of Undocumented Foreign Workers in France*, in OECD, *Combating the Illegal Employment of Foreign Workers*, Paris, Oecd, pp. 107-131.
- Massey, D.S. - Arango, J. - Hugo, G. - Taylor, J.E. 1993, *Theories of International Migration: A Review and Appraisal*, in «Population and Development Review», 19, pp. 431-466.
- Mezzadra, S. 2001, *Diritto di fuga. Migrazioni, cittadinanza, globalizzazione*, Verona, Ombre corte.
- Moulier Boutang, Y. 1998, *Dalla schiavitù al lavoro salariato*, trad. it. Roma, Manifestolibri, 2002.
- Ngai, M.M. 2003, *Impossible Subjects: Illegal Aliens and the Making of Modern America*, Princeton - Oxford, Princeton University Press, 2003.
- Papastergiadis, N. 2000, *The Turbulence of Migration*.

*Globalization, Deterritorialization und Hybridity*, Cambridge, Polity Press.

- Parreñas, R.S. 2001, *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*, Palo Alto, CA, Stanford University Press, 2001.
- Piccinini, M. 2003, *Cittadinanza in saturazione. Note per una critica dei diritti*, in «DeriveApprodi», 24, pp. 119-122.
- Piore, M.J. 1979, *Birds of Passage. Migrant Labour and Industrial Societies*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Portes, A. 1997, *Immigration Theory for a New Century: Some Problems and Opportunities*, in «International Migration Review», 31, pp. 799-825.
- Raimondi, F. – Ricciardi, M. 2004, *Introduzione*, in *Lavoro migrante. Esperienza e prospettiva*, Roma, DeriveApprodi.
- Rancière, J. 1995, *La Méésentente. Politique et Philosophie*, Paris, Galilée. [ランシエール(松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳)『不和あるいは了解なき了解——政治の哲学は可能か』インスクリプト, 2005年]
- Read, J. 2003, *The Micro-Politics of Capital. Marx and the Prehistory of the Present*, Albany, NY, State University of New York Press.
- Said, E.W. 1984, *Reflexions on Exile, ora in Id. Reflections on Exile and Other Essays*, Cambridge, MA, Harvard University Press, 2002, pp. 173-186 [サイード(大橋洋一・和田 唯・近藤弘幸・三原芳秋訳)『故国喪失についての省察(1)』みすず書房, 2006年].
- Sassen, S. 1988, *The Mobility of Labor and Capital. A Study in International Investment and Labor Flow*, Cambridge, Cambridge University Press. [サッセン(森田桐郎訳)『労働と資本の国際移動——世界都市と移民労働者』岩波書店, 1992年]
- Walzer, M. 1992, *What it Means to Be an American*, New York, Marsilio. [ウォルツァー(古茂田宏訳)『アメリカ人であるとはどういうことか』ミネルヴァ書房, 2006年]
- Zizek, S. 2004, *Organs Without Bodies. On Deleuze and the Consequences*, London – New York, Routledge [ジジェク(長原 豊訳)『身体なき器官』河出書房新社, 2004年].

## [付記]

翻訳に際して、訳者の質問に対して的確かつ迅速に返答してくれたサンドロ・メツァードラ、そして快く翻訳を承諾してくれたデリーヴェアアップローディのセルジョ・ピアンキに心より感謝する。

## 《訳者解説—サンドロ・メツァードラの仕事》

ここでは、簡潔ではあるが著者が行っている仕事についてしるしておこう。

サンドロ・メツァードラ Sandro Mezzadra (1963年6月22日生まれ)は、イタリアのボローニャ大学で政治思想史の教鞭をとっている。グローバルな現在社会が抱える困難についての彼の精力的な言論・執筆活動は、とりわけヨーロッパでは知られるところである。メツァードラの理論構成の基盤には、イタリアのオペライズモがあるが、彼の知の振り幅はかなり広い。たとえば、イタリアで最初に発表した著書は、法学に関するものだった(『社会的なものの政体構成——フーコー・ブレウスの政治・法思想 La costituzione del sociale: il pensiero politico e giuridico Hugo Preuss』)し、マルクスを政治的に読解することを試みた著作(『マルクス——政治的著作集 Marx: antologia degli scritti politici』マウリツィオ・リッチャルディとの共著)も数多い。さらに、より政治・社会運動に直結したかたちの仕事もある。たとえば、2001年にジェノヴァで行われたG8後には、オルタナティブなグローバル化運動の性質と未来について考察している(「ジェノヴァの彼方へ、ニューヨークの彼方へ——グローバルな運動についてのテーゼ Oltre Genova, oltre New York: tesi sul movimento globale」)し、『デリーヴェアアップローディ』誌というイタリアの雑誌で、ヨーロッパの運動、ポストコロナルな運動、北アメリカ、南アメリカ、オーストラリアの運動を特集した号の編集を担った一人でもあった。

だが昨今ではとりわけ、ポストコロナル研究やカルチュラル・スタディーズといった主に英語で循環している優れた業績をイタリアへ導入する仕事も積極的に行っている。たとえばグハヤスピヴァックといったインドのポストコロナル研究の著作を編集(『サバルタン・スタディーズ——近代性と(ポスト)コロニアリズム Subaltern Studies: modernità e (post)colonialismo』)し、イタリアのムリーノ社から発行されている雑誌『カルチュラル・スタディーズ Studi culturali』の運営に関わっている。そして、2008年には、メツァードラ自身のポストコロナル研究に関する著作『ポストコロナル状況——グローバルな現在の歴史と政治 La condizione postcoloniale: storia e politica nel presente globale』がオンブレ・コレテ社から出版された。

さらに、「政治的ヨーロッパ」をめぐる近年繰り広げられてきた議論に対しても積極的に介入してきた。新たに形成されつつあるヨーロッパの政治空間をどのように分析・理解するべきなのか、またどのようなヨーロッパを希求すればよいのか。この点については、社会学者アレクサンドロ・ダルラーゴとの共著論文「ヨーロッパの思考不可能なボーダー」(『政治的ヨーロッパ——必要なわけ Europa politica: ragioni di una necessità』(マニフェストリブリ社, 2002年に所収))、さらには法学者エンリカ・リーゴと

の共著「移民たちのヨーロッパ」(『ヨーロッパ, 憲法, 社会運動 *Europa, costituzione, movimenti sociali*』(マニフェストリブリ社, 2003年に所収))などが代表的だろう。

だがメツァードラの研究のもっとも中心的な主題は、ここで訳したような現代の移民に関する考察だろう(当然ヨーロッパ論, ポストコロニアル研究, ポスト・オペライズモといった他の主題とも切り離せない)。移民に関する著者としては, 2001年にオンブレ・コレ社から出版された『逃走の権利——移民, 市民権, グローバル化 *Diritto di fuga: migrazioni, cittadinanza, globalizzazione*』という素晴らしい本がある(スペイン語版 *Derecho de fuga: migraciones, ciudadanía, globalización* はインターネット上でみられる。<http://www.aulaintercultural.org/IMG/pdf/derechodfuga.pdf>)。2007年には, 移民の運動に対してより焦点が当てられた第2部を加えて, 『逃走の権利』の第2版が出版されている。この本は, 「ポスト・オペライズモの移民論」として, 国際レベルの移民研究はもちろん, 昨今の政治的・哲学的議論のなかにも位置づけられるものだろう。

ここで訳された論文「社会運動として移民をイメージせよ?——移民の自律性を思考するための理論ノート」は, このような方向へ進むメツァードラの研究の一つである。本論が収められているのは, 『自由のボーダー——現代移民の政治的分析のために *I confini della libertà: per un'analisi politica delle migrazioni contemporanee*』というデリーヴェアアップローディ社から2004年に出版された本である。メツァードラ自らが編集を行っているが, これはイタリアの状況を論ずるイタリアの研究者の論文だけで構成されているわけではない。シェンゲン空間の形成過程を統治性として読み解くカナダの社会学者ウィリアム・

ウォルターズの論文(もともとは *Environment and Planning D: Society and Space* 20, pp. 561-580に掲載されている), さらにはガッサン・ハージやニコス・パパスタギダス, そしてニコラス・デ・ジェノヴァといったオーストラリアやアメリカ, さらにはカナダやイギリスの優れた移民研究者たちによる論文も広く集められている。しかしいずれにせよ, これらの論文に共通するのは, 移民の移動を管理する装置, かれらの生きた労働を搾取する装置の分析と, それとの関係のなかで, さまざまな強度で発現する移民たちの主観性を浮き彫りにしているということである。ちなみにここで翻訳したメツァードラの論文は, インターネットのホームページ(<http://multitudes.samizdat.net/>)でオリジナルのイタリア語版に加え, フランス語, スペイン語で読める。

ここまでの話から, メツァードラの思考にとって「ボーダーconfine」という概念がもつ重要性は明らかだろう。彼の本や論文のタイトルにも「ボーダー」は含まれているし, ここで翻訳した論文でも幾度か言及されている。主観性の生産を強調している点で少し距離を感じるかもしれないが, 彼の議論が地理学との接点をもつのは自然なことかもしれない。とりわけ, オーストラリアのブレット・ニールソンとの共著論文「方法としてのボーダー, あるいは労働の多数化 *Border as method, or the multiplication of labor*」(<http://eipcp.net/transversal/0608/mezzadraneilson/en>)では, 空間論的展開をめぐる英語圏の地理学の研究成果にも批判的に言及されていて, 空間論的展開以降の地理学にとっても非常に興味深い内容となっている。「方法としてのボーダー」とは, 最近メツァードラが取り組んでいる研究課題の一つであり, 今後の研究の発展が期待される。

